

柏崎守先生を偲んで

元農林水産省家畜衛生試験場長柏崎守先生におかれては、病氣療養中のところ平成29年10月11日にご逝去されました。享年78歳でした。先生は、豚の集団衛生と SPF 豚技術の開発普及という切り口からわが国の養豚振興に大きな足跡を残し、日本豚病研究会会長、日本 SPF 豚研究会会長、日本 SPF 豚協会農場認定委員長等を歴任されました。加えて、豪快、お酒をこよなく愛し、一仕事終われば杯を酌み交わしながら同僚、後輩、若手の区別なく議論をし、関わった人々に多くの影響を与え、皆様の心に様々な「柏崎守」を遺して逝かれたものと思います。筆者にとりましても、突然の、早すぎる、とても残念なお別れとなりました。ここに、先生の在りし日を思い、ご冥福のお祈りしながら、追悼の一文をしたためさせていただきます。

柏崎先生は、昭和37年3月岩手大学農学部獣医学科をご卒業後、直ちに農林省に入省、家畜衛生試験場（家衛試）製剤部に採用となりました。配属された検定室では、その時代ですから無菌操作、ピペット操作などを厳しく指導され、時にはガラス製の20ml メスピペットで手を叩かれた昔話などを酒の肴に咽喉を潤されている先生の姿も懐かしく思い出されます。その後、昭和40年に研究第一部に異動され、まさに時を同じくして細菌第1研究室長浪岡茂郎先生を中心にスタートしていた SPF 豚の作出・利用技術の開発研究に携わることとなりました。この時が、私どもがよく知る柏崎守先生の原点が生み出された瞬間であったのだと思います。家衛試での SPF 豚に関する技術開発は疾病研究用実験動物の高品質化に加えて、SPF 養豚という産業利用を目指したものでした。このため、SPF 豚作出、利用技術の開発研究には、家衛試が得意とする微生物制御に関する技術開発だけではなく、産業利用のための集団変換に関する理論、技術の構築や SPF 豚の規格基準の策定、民間企業・農場との共同研究による SPF 豚の管理技術の確立など極めて広範な取り組みが求められた中であって、先生は終始その中心に身を置き、大きな足跡を残されました。現在の SPF 養豚の発展（仔取り用雌豚頭数の国内シェアで9.4%）の鍵となった SPF 豚農場認定制度の確立と運用に係る柏崎先生の貢献は極めて大きく、お亡くなりになる数カ月前まで認定委員長をお務めであったことから先生の認定制度に対する思いが想像され、特筆されるものと思います。

また先生は、SPF 豚作出、利用技術の開発の傍ら、細菌第1研究室において養豚の生産性阻害要因であった細菌性腸管感染症である豚の大腸菌症と豚赤痢に関する研究等を精力的に進められました。昭和48年には北海道大学から「豚の大腸菌症に関する研究」により博士号を授与されています。昭和40年代前半から発生が増加し問題となった豚赤痢は病原学的にも不明な点が多く、先生は昭和40年代後半から50年代前半、病原学的にビブリオが疑われた時代の終盤からトレポネーマに確定していく重要な時代に係わり、実験動物としてのノトバイオート子豚を活用した病原性の検討により *Vibrio coli* の起病性を否定し、国内病豚から *Treponema hyodysenteriae* の分離に成功した後に、その成果を基にノトバイオート子豚での病原性確認、感染抗体の検出法の検討、普及可能な選択分離培養法の改良、集落を視認困難なトレポネーマにおいて通常の方法では難しかった薬剤感受性試験法の開発、有効薬剤による予防・治療法の臨床研究といった一連の取り組みにより豚赤痢の国内での診断、予防、治療体制の確立に大きな功績を残されました。昭和50年代には大腸菌症について、特に腸管毒素原性大腸菌の家畜病態への関与の解明に取り組み、通常の De テストでは検出できず子豚の腸管ループテストでのみ検出できるエンテロトキシン（後の STp）について報告され、腸管出血性大腸菌の病原因子であるベロ毒素産生大腸菌の家畜への関与等についても明らかにされました。この間、昭和48年から2年間、ドイツ（当時西ドイツ）農業省食肉研究所に科学技術庁から派遣され家畜の腸内細菌に関する研究を行っています。その成果でしょうか、「ドイツにはビール法なる法律によりビールの規格が決められ、米とコーンスターチを使っている日本のビールは美味しいが、ドイツではこれをビールとは呼べない」という先生の講話を聴きながら美味しい「ビール」を楽しんだものでした。

柏崎先生は、研究生活の間、昭和56～57年度、昭和63～平成2年度と2度の霞ヶ関（農林水産省農林水産技術会議事務局）勤めを経験された後、家畜衛生試験場研究第一部長、同企画連絡室長を経て平成8年10月1日家畜衛生試験場長に就任されました。平成11年4月1日のご退官まで、日本の家畜衛生そして畜産を支える大役をお務めになり、豚コレラ撲滅計画を提言し、それまでのワクチンによる防疫から脱却する道筋を示し、日本の豚コレラ撲滅の実現の端緒を作り出したことは、家畜衛生試験場長としての先生の特筆すべき功績です。

筆者は、先生が企画連絡室長当時、1年半を直属の部下として一緒にさせていただきました。執務時間終了を知らせるチャイムと共に室長室から我々が執務する大部屋へ出てこられ、センターテーブルに着席、次第に研究部長の何人かがテーブルを囲み、ビールで咽喉を潤し、滑舌よく議論の花が咲く毎日でした。家衛試の使命や在り方、研究の方向性、行政との関係、組織体制の在り方、時には懐かしい昔話などなど、我々スタッフは背中でその議論を聞きながらパソコンに向かって仕事をし、仕事が済んだものが順次その輪に加わり、最後にはグラスを洗い、卓の後片付けをして帰宅する、といった毎日の情景が昨日のことに思い起こされます。この時の柏崎先生の薫陶あつての今があるということに思いを致し、「感謝」の二文字で筆をおきます。

柏崎守先生ありがとうございました。安らかに眠りください。合掌。

一般財団法人生物科学安全研究所理事長 濱岡隆文
(一般社団法人日本 SPF 豚協会 SPF 豚農場認定委員会委員長)